

東京歌会（第四十六回）

平成二十八年八月十八日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二百十首。出席者四名（市川茂子、小野澤繁雄、林博子、松井淑子）。

手を振って名を呼ぶ声に明るさに女子高生ら街かわりても

小野澤繁雄

集まると、どこでもにぎやかな女子高校生たち。よく見る光景でもある。結句が判りにくい、また四句までとのつながりにも難がある。二、三句を含めて全体に切れすぎで、ながれていない、と。

「風まつり」と言う駅の名に心ゆるる

同胞親族なべて遠退く

林 博子

囑目としての駅名。ここでは「風まつり」だが、風があつて「（心）ゆるる」というところ。現地で詠まれているようだ。そう読める。駅はまた多く旅の途上なので、下句、離郷者、年齢（高齢者）の立場から共感できるものがある。

二宮の駅前にして銅像がガラスのうさぎを抱きてゐたり

中川禮子

一首で、事実はいくらもいらされているが何か説明されていない感じがある。二宮、ガラスのうさぎ、とあることから、いくらか解に近い議論ができてはいたが。

知事の座に着かんと叫ぶ選挙カーをかこむ夏日の老若男女

市川茂子

老若男女は余り歌では詠まれていない。着座といういいかたがあるので、「着かん」でいいのか、また、知事の座は職責のことなので、その場合「就かん」となるのか。夏日の、なので、この間の都知事選のことであろう、と。選挙カー（を）でいったん切つて、この、を、を取つたらいい、と。同じ夏日下で、作者はやや冷めている。

山道に赤き幟の立ち並び観音様の例祭を告ぐ

布宮慈子

みている通りとも、といつてどこでも簡単に詠めるわけではない。詠草は各二首なので、二首目でも少し説明できるといふことがある。「岩谷十八夜観音の火渡りは十八日にあるとふ見たし」（以上、二首目、こちらも好評）。

東京歌会（第四十七回）

平成二十八年九月十五日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二百十首。出席者四名（市川茂子、小野澤繁雄、林博子、松井淑子）。

夏枯れの庭そのままに幾日過ぐ心模様を見る思いなり

市川茂子

下句がやや他人事で、じぶんの家の庭のことでない感じもする、と。小規模な庭か。そのま
まに、は、そのままにして。心模様をじかに云っていない、歌はかたちになっている。

犬にそのかまわれている女性には声もとどかず顔で云うのみ

小野澤繁雄

犬をかまう、でなく犬にかまわれているという。下句でさらに説明しているが、声もムリで、
顔ではいいということは可能だろうか。初句の、その、はいかにもとってつけたようなところ、
音数合わせか。

この春は一だんと緑濃しときく兄逝きしより一月を経し

中川禮子

ことしの春のおとずれを待たずに、という背意が読める。春の緑のことも、したがって他所
事なのだ。ときく、の間接性、は少し議論された。一だんと、の表記についても。歌が機能し
ている。よくわかる歌でもある。

就職に離れゆきし子が物取りに帰り来て夕餉ののち帰りゆく

林 博子

帰り、がかさなるので、（物取りに）よりて、としたと当日作者が直している。就職からそう
時間が経過してない感じがする。子のふるまいのあっさりとしたところがいかにも今か。物
取りに、も簡潔。よくわかるが、子の歌でなく孫歌だという。こういうことは多くなったかも
しれない。

小雨にて煙る峠の山々は巖かにして無音の大きさ

布宮慈子

どこの峠というか、日本の峠。一首目から、米沢、福島をつなぐ鉄道沿いということがしれ
ている、これは二首目。墨絵をみるような感触がある。無音の大きさ、は含みのあるいいかたで、
郷愁が大きくしているようなところがある。

東京歌会（第四十八回）

平成二十八年十月二十日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二百十二首。出席者五名（市川茂子、大石久美、小野澤繁雄、松井淑子、丸山弘子）。

枕辺に歴史の本をあまた積み残しし兄の学びを思ふ

中川禮子

机上でなく枕辺。積み残しし、には病んでいて、二首目で祭壇とあるので、（そのあと）喪つたようだった。その兄のことを詠っている。歴史の本という括り方、そこから、兄の学びを思ふ、には簡潔で気持ちのあるところ。

高橋は人の名ならず橋の名に今日みる歩き小名木川ぞい

小野澤繁雄

高橋は、清洲橋（隅田川）寄り、小名木川に架かる橋で、読みは、たかばし、らしい。江東区は運河のまちで、川も橋も多い。そこを歩いたということでもある。何か雰囲気のある歌、ということになった。

名は知らねど覚え来し花の玉すだれ咲く秋立つ庭に

市川茂子

玉すだれ、が余り知られていないので、上句で手続きをとったようだ。花の、も断っているところ。ヒガンバナ科の花で、二首目の、白の浮き立つ、からも白花ということがわかる。しみじみとしたところのある歌、と。

食草のパンジー花季過ぎたるにツマグロヒョウモンふらふらと居り

丸山弘子

さいしょ誤って食草と読んでしまったが、幼虫時代に、スミレ類（園芸種のパンジーまで）を食草としている。もともと南方系のチョウだが、生育域が北上した。ふらふらと居り、は、花季過ぎたるに、をよく受けているようだ。

稲刈りを待つばかりなる田んぼにて飛びたつてゆく白鷺青鷺

布宮慈子

ほのぼのとした味がある。青鷺是水辺の鳥という理解がある。それもあるが、結句、白鷺一羽、などと白鷺に限ったほうがよいかもしれない、と。

ビルに浮かぶ入道雲愛しませ日々変わりゆく朝を語らむ

大石久美

作者の手術退院後の歌。秋の入道雲、ということもあるが、ビルの中に湧いて、それを見た朝も、別な朝も日々のことでもある。語ることのあることの、何か愛しさ、なのだろう。受身でもあるようだ。

（小野澤繁雄）